

〈近世史料論〉

日本近世紙幣史管見

鶴岡実枝子

目次

- 一 はじめに
- 二 紙札のはじまり
- 三 前期の私札
- 四 前期の藩札
- 五 後期の藩札
- 六 私札的藩札
- 七 幕末畿内における紙札の流通状況
- 八 終りに代えて

はじめに

日本における近世貨幣史の研究は、近世の経済発展・権力の問題など、幕藩体制の構造的特質の解明に欠くべからざる分野にも抱わらず、その取組みにくさの故か、最も遅れた分野と指摘されて久しい。その中であつて作道洋太郎氏がこの未墾の分野、特に従前看過され勝ちであつた幕府正貨以外の、藩札をはじめ手形・切手等の信用貨幣としての紙幣史研究にメスを入れ『日本貨幣金融史の研究』（一九六一年）を上梓されたことは画期的なことであつた。ただ作道氏の藩札の信用貨幣説には田谷博吉氏の批判があり、信用貨幣か政府貨幣かの対立がある。⁽¹⁾

現在の私には、そのような論点に立ち入って述べる能力もないし、蓄積もない。たまたま公務で史料館所蔵の古紙幣コレクションの整理を担当した中で、従来定説的に取扱われている通説に疑問を感じた点や、若干新しく知り得た事実を羅列するに過ぎないことを最初にお断りしたい。

紙札のはじまり

我が国の紙札の始源は一七世紀初頭の慶長末年と推測され、現存最古の羽書の存在が確認されている伊勢国の山田羽書を以つて日本の紙幣の始源とするのが、ほぼ定説のようである。もっともその発生の時期については室町末期とも慶長年中ともされ、不明の部分が少くない。「神境秘事談」⁽²⁾に

山田羽書の事は慶長の頃よりはじまり、元は金子のとりやりせるに、何分何厘などいへる端のむつかしければ、紙へ書切手てふものにてわたし、いつにても料錢に引かふる事にてありしか、此事いとたよりよければ、後は三分五分より老奴に及びて、いま羽書てふものとはなりぬ、そののち人々より会合へ株を望み、四百四株をゆるす、

一株三貫目代金五拾兩、此かはりとして五貫目の質物を取り置通用せしより、今の羽書といふものはいてきぬ、もとより山田かきりのものにて、名も元は端書と書しか、よく通用せるゆへ、鳥の羽に准してのちは羽書と改めしなり云々

と説明されている。すなわち、金子のやりとりで端数がでて不便なため、その端銀の額を紙片に書いて相手に渡し、何時でも現銀に引換えることを約束した端書Ⅱ引換証・預り証であったのが、やがて兌換券として紙幣の体裁を整えるようになったというものである。もっとも、これは後年の著述であって、伊勢外宮の師職たちが三方会合と称する自治的な行政機関を組織し、羽書の発行がその管理下に置かれたという流れを時期的に確定するのは困難であるが、発行権としての株が四〇四株（四〇組Ⅱ一組一〇株）となったというのは、江戸中期の元文五年（一七四〇）である。江戸期にいわれる伊勢商人として三都をはじめ他国へ進出し、著名な富商を輩出した伊勢地方は中世以来商業が発達し、伊勢参宮の盛行もあって、この山田羽書のほかにも、鳥羽・松坂・丹生・射和などでも、江戸前期に商人の資力を背景とした羽書の発行が確認されている。

ところで、このように近世初頭における代用貨幣としての紙札の発生・行用はどのような背景をもつものであったのであろうか。すなわち中世末から近世初頭にかけての通貨事情についてみると、一二世紀ごろから始まった中国銭の流入は次第に増加し、一三世紀の後半期には、この銅貨の使用は全国的規模に及んだという。この銅貨は中国歴朝のものを含むが、北宋銭が最も多く、一五世紀に入って室町幕府による遣明船が持ち帰った永樂通宝など明朝前期のものが、これに次いだという。もっとも一五世紀中ごろから明は銅銭の国外流出を制限あるいは禁止したから、日本への中国銭の流入は減少した上、国内の銭貨は長期の行用のため、磨滅・破損も甚しく、加えて国内外の粗悪な私鑄銭も多く出廻ったため、一五世紀の後期にはこれら劣悪な銭貨Ⅱ悪銭の増加により撰銭が一般化したことは、よく知ら

れている。室町幕府や戦国大名は通貨安定策として屢々撰銭令を發して撰銭行為を制限したり、精錢と惡錢の區別を公示して、その交換比率を法定化するなどしたが、効力は乏しかったと云われる。

このように中世末から日本国内で精錢不足と、それに伴なう撰銭現象が一般化した一方で、一六世紀中ごろから採鋳技術の發達・金銀鋳業の開發が急速に進展し、金銀塊の使用が広汎に始つたという。もちろん、それらは統一された金銀貨であつたわけではなく、金は砂金であつたり、「のべきん」「板金」「竿金」と呼ばれるものであつたし、銀は灰吹銀であつた。そして戦国大名は主として軍用・褒賞贈答用として重用し、莊園領主は錢貨に換えて消費財購入の支払いに用いられた。このように品質・形態の異なる金銀の混用が広まるにつれて、京都・奈良・堺などの畿内の諸都市や戦国大名の城下町、街道筋の宿駅などには金銀の兩替売買を営む業者が生み出されていった。彼らのうち有力なものは領主から金銀兩替の營業を特許され、その營業は單に金銀兩替を行なうのみでなく、金銀の吹替・秤量・封包から判金・極印銀の鑄造をも行なつた、いわゆる金匠・銀匠としてあつたのであり、座を組織して³⁾いた。

中央政權による全国的な幣制の統一は慶長六年（一六〇一）徳川幕府による慶長金銀の發行によつて着手されたことは周知の事実である。もつとも慶長金銀の發行によつて全国貨幣の統一が直ちに實現したわけでないことは云うまでもないことであつて、一七世紀前期には戦国・織豊期から引繼いて地方的通貨としての領国貨幣が予想外に広汎に通用されていたことは既に報告されている。これら主として後進地帯の領国貨幣の存在は、幕府の鑄貨量が不足していた前期において補完的役割を果し、しかも幕府の發行する全国貨幣の統一的性格を排除するものではなかつた。これら領国貨幣は専ら領内で通用し、領外では幕府の貨幣に兩替されたから、領国貨幣の幕府貨幣への吸集に結果し、幕府貨幣の鑄造原料ともなつたのである。そしてこの領国貨幣の停廃・消滅による丁銀への切替は、加賀藩の朱封銀の停止令が寛文九年（一六六九）であつたことに象徵されるように、寛文―元禄の間であつたと云われている。⁴⁾

一方、庶民の日常通貨であつた錢貨について、幕府の貨幣政策についてみると、開幕当初は前代から東国に於て善錢として通用した永樂通宝を基とし、その他の錢をビタと称し、永樂錢一を以つてビタ四個に當てることとしたが、慶長十一年（一六〇六）慶長通宝の發行に次いで、同一三年永樂錢の通用を停止し、さらに元和三年（一六一七）元和通宝の發行が行なわれたが、なお在来の永樂錢・洪武錢など各種の惡錢の混用は續いていた。つまり永樂錢の通用禁止令とは現実には永樂錢もビタとして扱うことを意味したのであつた。例えば「台徳院殿御実紀」元和二年五月十一日の条に

十一日令せられしは、大かけ、われ錢、形なし、ころ錢、新錢、鉛錢、この六錢の外は官廩にも収用せらるれば、民間にて善惡をえらばず、金一方に錢^{（分カ）}考貫文をあてゝ通用売買すべし、もしこの六錢の外をえらび取捨するもの有か、又この六錢をおして用ゆるものあらば査検して、その面に烙印せしむべしとなり

とみえ、その名称から推して、およそ錢貨と呼べないようなものを除く他の惡錢の通用を認める、一種の撰錢令が踏襲されており、違犯者は顔面に烙印という敝罰が科されることになつていた。同様の趣旨の法令は寛永二年（一六二五）八月にも發せられ、さらに寛永通宝發行後の延宝二年（一六七四）二月の「定」^{（三）}にも襲用されている。

すなわち、徳川幕府の錢貨統一の本格的な着手は寛永十三年（一六三六）に始つた寛永通宝の發行であり、下つて寛文期の大鑄造によつて、ほぼ貫徹されたとされているが、錢貨の需要に應える供給不足の解消には、さらに年数を必要としたと思われる。

このようにみると、慶長ごろから始まつたという山田羽書を初めとする伊勢羽書の發行は中世末以来の精錢の不足と、それに伴う撰錢によるトラブル回避、さらに新しく始まつた金銀貨の使用に伴う端銀・端錢処理の便宜のために生みだされてきたものとみてよいのではなからうか。その背景には生産力の上昇による商品流通の發展によ

る貨幣需要の増加といった面も見逃せないと思う。

前期の私札

日本の紙幣の濫觴とされる山田羽書について、伊勢商人の金子の取引の便宜によって発生したとする通説に対して、異を唱えられたのは田谷博吉氏である。⁶⁾氏によれば、山田羽書の発生は伊勢両宮への祈禱を以って専業としていた御師のうち、特に外宮に附属していた御師たちが、諸国の旦那（信者）廻りで豫め受取った参宮費、それは主として金銀貨であったから、旦那たちが実際に参宮のために上ってきたとき、門前町山田での支払いには小払いに不便であったから、金銀貨の端の部分を二分とか三分、五分、一匁というような微小な銀目に分割して、これを預り証として交付したものであつて、このような山田の御師を商人と規定することも、元来参宮費の預り証から出発している山田羽書を、伊勢の商人の信用を基礎にして発生した紙幣とすることは論外とされる。確かに江戸期の山田・宇治羽書は、そのような形で通用したのであるから、他地の富商たちが発行した私札と区別すべしとする田谷氏の指摘は傾聴に価する。ただ当時の御師の実態は不明であるし、江戸期の慣行をそのまゝ近世初頭まで遡らせることが可能なのか、判断の難しいところではある。

ここでは前期の伊勢羽書のうち、具体的な発行状況の判明する、殆んど唯一の史料として、射和（現松阪市）の富山家について河原一夫氏の整理を借りてみてみよう。

飯野郡射和村は松坂の南二里余、伊勢神宮へ四里、伊勢街道より南へ一里半ほど外れているが、熊野街道の交通上の要地であり、松坂に城下町ができるまで南勢地方の物資の集散地であり、宿駅でもあったという。⁷⁾近郷の丹生（現勢和村）産の水銀を原料とした輕粉（白粉）の特産地として知られ、その白粉の製造は射和の庄屋階層の人々によつ

て世襲され、一六世紀の最盛期には、釜元が八〇軒を超えた⁽⁸⁾とされる。その射和村には伊勢商人として著名な家城・国分・竹川・長井家等の富豪が存在が知られ、羽書の発行も富山家のはか、札野札・仲嶋札などが現存する。富山家の羽書発行に至るまでの蓄積過程は不明であるが、富山家の元和十年（一六二四）寛永元⁽⁹⁾と表記された大福帳（裏表紙は羽書仕入帳）は同家で発行した羽書の受払簿であって、寛永元年から明暦二年（一六五六）の三二年間に総額二八貫二〇四匁七分の羽書を発行している（第1表）。その間、寛永一二年一二月と正保三年一〇月に新札への切替えがあり、大福帳に新しい羽書の引換文言の印判や、複数の印章の組合わせを載せ、旧札との区別が可能のように配慮されたことが判る。初発の寛永元年三月一日から一月一七日にかけて一五回にわたって発行された一二貫四一七匁一分を除けば、以後は一貫から二貫目前後の発行額であるが、最後の第三期分の明暦元年分を除けば、発行高と回収高には殆んど乖離が認められない。すなわち同時期の同家の羽書の発行

第1表 射和村富山家羽書発行状況

	発行年月日	発行高	回収高（最終回収年月日）
I	寛永元. 3. 11～元. 11. 17 (15回)	12,417.1 [㊦]	16,352.1 [㊦] (寛永16. 8. 18現在)
	寛永2. 3. 16～2. 3. 26 (3回)	2,333.5	
	寛永6. 夏 (1回)	574.7	
	寛永7. 3. 25 (1回)	1,284.2	
	小計	16,609.5	
II	寛永12. 12. 10～12. 12. 28 (2回)	645.5	7,296.7 (承応2. 7. 21現在)
	寛永13. 1. 29～13. 4. 2 (3回)	2,642.7	
	寛永14. 5. 2～14. 6. 13 (2回)	1,553.0	
	寛永15. 3. 13～15. 3. 25 (3回)	2,655.9	
	小計	7,518.6	
III	正保3. 10. 吉日 (1回)	2,360.6	3,377.8 (明暦元. 12. 現在)
	正保4. 3. 吉日 (1回)	1,216.0	
	明暦元. 12. 吉日 (1回)	500.0	
	小計	4,076.6	
	総計	28,204.7	27,026.6

河原一夫『江戸時代の帳合法』（P. 19～20）より

は貨幣量の拡大に結果していない状況を示すものと思われる。

なお同家の発行した羽書（預り札）の額面の種類は初発の寛永元年に限り貳匁札一〇〇枚を発行しているが、二回目以後は一匁以下、一分刻みで、二分までの九種類であった。第2表にみられる通り、通用の主軸をなしたのは一匁札であり、次いで五分札の需要が多かったことが窺われる。

以上、伊勢国における個人レベルの羽書の発行の一例を紹介したが、近世前期において畿内においても私札の発行がかなり広汎

に行なわれていたことは紹介されている。その代表的な事例としては、元和三年（一六一七）大坂の江戸堀川開鑿に際して、桔梗屋伍郎右衛門・紀伊国屋藤左衛門の兩名が発行した「江戸堀川銀札」と、元和八年から寛永元年の三年にわたって発行されたと推定される堺の木地屋庄右衛門発行の「夕雲開銀札」である。朝尾直弘氏の報告によると、「夕雲開銀札」の発行人木地屋庄右衛門は筒井姓で、順慶の後商と伝えられる豪商で、元和一寛永期の畿内の水利土木工事に活躍した幕府代官高西夕雲と懇意であった関係から、夕雲が開発した九條若しくは堺百舌鳥村の夕雲開に際して資金を提供し、銀札の発行があったものと推測されている。恐らく江戸堀川銀札・夕雲開銀札とも、人足賃の支払いに充てられたと推測されており、短期間の発行に終わっている。現存の筒井家文書を採訪され、六九〇枚という大量の木地屋銀札を発見された朝尾直弘氏の報告によると、六九〇枚の内訳は一匁札六七四枚、五分札五枚、参分札六枚、貳分札六枚であって、その筒井家の回収札の存在だけで推論することは、やや憚られるが、前にみた富山家同様、一匁札の需要が最も多かったことが窺われる。

第2表 富山家発行羽書の内訳

額 面	発行枚数	発行回数
1 分	— [㌦]	— [㌦]
2 分	1,880 [㌦]	12
3 分	2,283	13
4 分	1,367	10
5 分	6,752	24
6 分	1,529	12
7 分	2,192	15
8 分	1,574	11
9 分	248	4
1 匁	16,206	26
2 匁	100	1
計	34,131 [㌦]	128 [㌦]

河原一夫『江戸時代の帳合法』
(P. 19~20)より

因みに、『三貨図彙』によつて、元和期の大坂の米価を確かめると、元和二年四月玄米一匁ニ四升ツム（一石ニ二五匁）、元和三年四月一匁ニ五升から六升（一石ニ二〇匁〜一六匁）とみえ、当時の米価はかなり不安定であるが、元和六年の畿内代官末吉氏の年貢算用書中、土木普請費の支出の項目に「わくかせ仕候大工手間ノ入用、工数六拾七人米、但屯人ニ付四升五合宛」との数字が見出されるから、当時の人足の日当が銀一匁にはば相当していたのではなからうか。

このように江戸堀川銀札・夕雲開銀札は、一時期に集中して大量に生じた貨幣需要に応じて発行された私札の事例であるが、恒常的に流通した私札としては、大和国においては南北朝時代に発生したとの口碑をもつ吉野郡下市の「御免銀札」、寺内町として有名な今井町（現橿原市）の寛永十一年（一六三四）の銀札発行が早い事例として紹介されているが、史料の裏付けに乏しく、詳細は明らかでない。

ところで、このような前期の畿内における私札の行用について、幕府の対応なり認識がどのようなものであったかは、従来言及されていない。⁽¹³⁾次に紹介する摂津国住吉郡平野郷町（現大阪市）の場合、やや具体的に知り得ると思うので、とり上げてみたい。

中世末に堺と共に自治制を有し、初期の豪商の代官末吉氏の本貫であった平野郷町は、畿内綿業の中心地であった。同地の銀札の初発は従前慶安四年（一六五二）とされていたが、近年作道洋太郎氏によつて、寛永元年以前であることが指摘された。⁽¹⁴⁾そのことを裏付ける史料として、宝永四年（一七〇七）の平野郷町の書上を引用すると

一平野郷町銀札之儀、百卅三年以前天正三亥年始り申、大坂御陣之時中絶仕、八十七年以前元和七酉年中興仕候処、狼敷罷成候故、五十七年以前慶安四卯年平野御代官末吉孫左衛門様、地下年寄共御断申上候て、札高百拾七貫目、但三貫五匁貫五百目之札株ニ致、人数四拾四人札元を極、右銀札之質物ニ田畑屋鋪地下年寄共へ取

置、若札元滞義御座候得は質物地下へ引請相捌申答ニ相定、当地ハ不及申上、他領迄通用仕来候御事

一 銀札高百拾七貫匁、式割引ニ仕、正銀九拾三貫六百目ニテ御座候故、老匁之銀札ハ正銀八分ニ通用致候御事

一 右銀札之儀、先年大坂町御奉行石丸石見守様、平野御代官末吉勘兵衛様へ御尋被成候ニ付、地下年寄共へ大坂

御奉行所へ被召出、様子委細申上候上、石見守様江戸へ御持参可被成由ニテ銀札三枚被召上候、尤御地頭様、

御代官様御替之節ハ毎度此銀札之御断申上候御事

とあり、當時の平野郷町の領主であつた上野国高崎城主松平氏の陣屋、六万寺村（河内郡、現東大阪市）役所へ町年寄四名の連名で提出したものである。これによると、平野郷町では銀札の創始を天正三年（一五七五）としているが確証はない。但し中絶後の再開を元和七年（一六二一）とすることは、作道氏の検証からみて、ほぼ間違ひはない。

その後慶安四年の改正を経て、発行規模は総額で一七貫目、札元は四人を定数としたといい、一口は凡そ三貫目の発行であつたこと、田畑屋敷を抵当として町役元が預り、信用維持に當つたことが知られ、その仕法は従来紹介されている山田羽書に類似していたことが判明する。そして天領時の平野代官末吉勘兵衛の時（寛文一延宝期）、大坂町奉行石丸定次に町年寄が呼出されて銀札について糺され、見本として銀札三枚が召上げられ、江戸表まで披露されたこと、領主・代官の交替の都度、銀札遣いのことを届出ていたというから、一応領主の追認を得ていたことが判る。なお、この平野郷銀札が他領まで通用していたことに言及しているが、同時に近在の銀札発行状況についても、その創始は明らかでないとしがならも、久宝寺村・八尾村（共に現八尾市）の銀札は平野郷町へも通用のこと、河州小山村（現藤井寺市）・河州友井村（現東大阪市）・摂州喜連村（現大阪市）の銀札は三年乃至七、八年以前から始つたが、平野郷内では通用しなかつたと答申している。

このようにみると、宝永四年の札遣い禁止令以前の在郷町の私札については、施政者側も、ある程度関心は持

ったものの、黙認の形をとったことが窺われる。¹⁶そして、このような畿内農村における広汎な流通は中世末以来、荘園体制の内部における生産力の高さや、農民の流通過程への参加という、畿内の先進性の表現であり、棉作を中心とする商業的農業の発展に重要な役割を果たしていたであろうことを窺わせるのである。

三、前期の藩札

江戸時代における藩札発行の嚆矢は福井藩の寛文元年（一六六一）とされている。ところが『福山市史』（昭和四三年刊）によると、備後福山藩では寛永七年（一六三〇）に銀掛屋菊屋太兵衛を札座とする銀札遣いが始まったことを明記している。¹⁷当時の福山城主水野氏は元和五年（一六一九）福島正則の改易のあとをうけて大和国郡山から福山に入封（二〇万石）しており、或いは大和国で通用していた銀札遣いを是として福山領内に実施したことも考えられる。従って藩札初発の寛文元年説は訂正しなくてはならないが、いずれにしても寛文元年の福井藩の発行を契機として、諸藩の藩札の発行は寛文一・元禄期に集中的に行なわれ、宝永四年の札遣い停止令までに、知られる限りで五二藩に及んでいる（第3表参照）。その内訳は山陰・山陽の中国地方が二三藩と突出し、以下九州七藩、畿内と南海道（紀州一、四国四）が各六藩、北陸五藩、東北二藩、東海（尾張）、東山（大垣）、関東（水戸）各一藩となっている。

ところで、前期の畿内農村における私札の発行が領主への届出によって、一応追認の形をとっていたことを平野郷町についてみたが、このような諸藩の藩札発行について、当時の幕府が如何なる認識を持っていたかは意外に伝わらない。福井藩の場合、『大日本貨幣史』は「はじめ諸書に幕府の許可を得て発行したとみえ、その許可理由としては「紙幣整理始末」に「抑モ此藩札ハ寛文年中越前福井藩主松平忠昌カ国有ノ不足ニ苦ミ、嘗テ旧幕府力越前家ニ約シタル増封ヲ履行セサルヲ口実トシ其許可ヲ得テ藩内ニ発行セルヲ嚆矢トス」と説明されている。確かに「嚴有院殿御実

第3表 1707年(宝永4)禁令以前の藩札発行状況

城 地	領主	領知高	初発年次	城 地	領主	領知高	初発年次
備後福山	水野氏	101 ^{千石}	寛永7(1630)	石見浜田	松平氏	58 ^{千石}	元禄7(1694)
越前福井	松平氏	447	寛文1(1661)	大和柳生	柳生氏	10	元禄10(1697)
和泉岸和田	岡部氏	53	" 2(1662)	伊豫宇和島	伊達氏	100	" 11(1698)
土佐高知	山内氏	172	" 3(1663)	丹波柏原	織田氏	20	" 11(")
尾張名古屋	徳川氏	619	" 6(1666)	摂津三田	九鬼氏	36	" 13(1700)
但馬出石	小出氏	45	延宝2(1674)	美作津山	松平氏	100	" 13(")
出雲松江	松平氏	186	" 3(1675)	陸奥会津	保科氏	230	" 13(")
播磨姫路	松平氏	150	" 3 ₂ (")	加賀大聖寺	前田氏	60	" 14(1701)
美作津山	森氏	168	" 4(1676)	越中富山	前田氏	100	" 14(")
因幡鳥取	池田氏	320	" 4(")	播磨竜野	脇坂氏	53	" 14(")
摂津麻田	青木氏	10	" 5(1677)	備中庭瀬	板倉氏	20	" 14(")
長門萩	毛利氏	324	" 5(")	備後福山	奥平氏	100	" 14(")
摂津尼崎	青山氏	48	" 5(")	備中岡田	伊東氏	10	" 15(1702)
肥前平戸	松浦氏	61	" 5(")	紀伊和歌山	徳川氏	555	" 15(")
豊前小倉	小笠原氏	140	" 6(1678)	備中松山	安藤氏	65	" 16(1703)
周防徳山	毛利氏	45	" 6(")	筑前福岡	黒田氏	423	" 16(")
周防岩国	吉川氏	60	" 6(")	但馬出石	松平氏	48	元禄年間
但馬豊岡	京極氏	35	" 6(")	越前丸岡	有馬氏 ₂	50	"
備前岡山	池田氏	275	" 7(1679)	越前勝山	小笠原氏 ₂	22	"
阿波徳島	蜂須賀氏	205	" 8(1680)	筑前秋月	黒田氏	50	"
播磨赤穂	浅野氏	50	" 8(")	常陸水戸	徳川氏	350	宝永1(1704)
美濃大垣	戸田氏	100	" 8(")	伊豫松山	松平氏	150	" 1(")
筑後久留米	有馬氏	200	天和1(1681)	安芸広島	浅野氏	376	" 1(")
陸奥仙台	伊達氏	595	" 3(1683)	肥後熊本	細川氏	475	" 1(")
大和郡山	松平氏	80	元禄5(1692)	筑後柳川	立花氏	109	" 1(")
丹後田辺	牧野氏	35	" 7(1694)	讃岐丸亀	京極氏	51	" 2(1705)

紀」万治三年七月九日の条に「松平越後守光長家計窮乏するよし懇請するによつて銀三千貫目恩貸せらる」とみえ、翌寛文元年藩札発行の原資とされたことは推測されるが、増封をしなかった見返りとして藩札発行の許可を得たものか否かは詳かでない。少なくとも、次に示す毛利藩の事例では、寛文一延宝期の西国諸藩の多くは幕府に無届の発行であつたことが知られるのである。

すなわち『毛利十一代史』によると、延宝四年、負債高一万二千貫目余となり、江戸・大坂での新規借入れも不調となり、財政窮乏に困惑した毛利藩では、近年家中に課していた高百石につき四石の出来を六石に増すなど行なつたが、それでもなお糊塗できず、銀札発行が計画された。その時の幕府への対応を次のように記している。⁽¹⁹⁾

一井上六郎右衛門を以御国より申来候は、御所帯御逼迫に付て別に可被仰付様無之候間、御国中を札遣に被仰付候は、少は御たりにも可相成候、大体之御首尾別条有之間敷候哉、卒度於江戸御聞合にて不苦儀に候は、達御耳、札遣に被仰付候様にと被申越候に付て方々聞合被仰付、札遣被仰付候御大名衆之様子承合候処に、御一門中様にては松平大和守様（直矩、播州姫路城主一引用者注、以下同）・松平出羽守様（綱近、雲州松江城主）・松平兵部少輔（兵部大輔昌親カ、福井城主）などにも札遣被仰付候付て聞合被仰付候処、大和守様御家来札遣仕候功者之仁有之付、六郎右衛門に相対いたさせ様子相尋申候、公儀向へきつと御伺にては札遣不相成首尾に候、いつ方にも札遣候所あまた有之に付て、左様之所を御聞合せて大和様にも札遣被仰付候との儀に付、此御方之儀も公儀へ御伺候は、相成間敷候、御並多き事候間、先札遣被仰付可然之通御相談之上被達御耳に、御国へも弥札遣候儀御沙汰候て、御取立御覧候様にと六郎右衛門に委細相合被差下候事、右之様子に付て御国中札遣候儀、公儀へハ終に内伺無之事

国用不足の最後の手段として、銀札の発行を企図した毛利藩では、国許から世帯方井上六郎右衛門を江戸へ派遣し

て、既に藩札を發行している親類筋の大名家へ内々で情報を蒐集したところ、姫路藩の家来で札遣い功者の者の伝えるところでは、公儀へ正面きつて伺出れば不許可になる筈で、姫路藩でもそのような情報を得て無届で銀札の發行に踏みきったというので、毛利藩でも公儀へ無届で実施したというものである。

福井藩に次いで寛文六年に藩札（判書）を發行した尾張藩でも、幕府へ無届で發行した故に、藩札の發行が失敗に帰した同八年、回収資金の拝借を幕府に願出ることができない苦衷を味わされることが、所三男氏によって報告されている。⁽²⁰⁾

なお、前期の藩札の大半が銀札であった中で、例外的に金札を發行した東北の仙台藩では、貞享元年（一六八四）勝手向困窮のため、老中堀田筑前守へ内意を伺いの上、領中の金子を悉く取上げ、その引替えに正金と同直段に通用の紙札を渡したところ、領民こそって迷惑し、悪政の風評が近国他国まで流布し、このことが江戸の殿中にも噂となり公儀役人から早々停止の内意があったが、数百万の紙札を早速つぶして正金に引替える手段はないとして、二年間の猶予を願い、元禄元年に漸く大概の引替を完了したことを「仙台貨幣志」は伝えている。⁽²¹⁾

このように、幕初以来貨幣の統一に腐心している幕府に対して、諸藩が藩札の發行に當って、幕府の意図を忖度したことが窺われるが、西国と異なり札遣いの慣習に馴染まない会津藩でも、元禄一三年（一七〇〇）老中阿部正武・小笠原長重、側用人柳沢吉保・松平輝貞へ内意を伺出の上、金札遣を実施したが、早々に贋札も現われ、同一五年には「甚不流行」につき、金札の停止に踏み切らざるを得ず、札遣いを建策した元入役長井九八郎は死罪となっている。⁽²²⁾

宝永二年（一七〇五）八月、幕府は諸藩や町村に対して札遣いの開始年次等の調査を行ない、全国法令として札遣いの禁止を布告したのは、同四年一〇月である。「金銀錢札遣之所も有之候て、札遣無之処通用のため不宜候条、向後札遣停止之事候」とあって、布達より五〇日を限って停止を命じている。そしてそれは藩札に止まらず、神領の故

を以つて特例を認められた山田羽書を除き、私札（町村札）にも及ぼされたのである。

この札遣い停止令は一般に元禄の悪鑄と云われる元禄—宝永の改鑄—それは特に銀貨の増鑄であつたと、翌年の大銭（十文銭）の發行に關連づけて理解されている。『三貨図彙』には、この停止令によつて錢相場が高騰したことを告げている。すなわち一〇月一〇日頃、錢一貫文が元禄銀で一〇匁九分であつたのが、俄かに一二匁五分より一三匁五分となつたとあり、紙札が錢貨の代用であつたことを示している。

四、後期の藩札

宝永四年の札遣い禁止令が元禄—宝永の改鑄、特に宝永銀の大増鑄のさ中に行なわれたことを指摘した。この禁令が事實上、不換紙幣化していた銀札遣いの諸藩にどのような影響なり後遺症を与えたかは想像に難くないが、それから二三年を経過した享保一五年（一七三〇）六月、幕府は札遣いの解禁令を布告したのである。⁽²⁾

前々より仕来候所にて金銀錢札遣之儀、貳拾万石以上貳拾五年、貳拾万石以下は拾五年之間たるべく候、年数満候ても猶又札遣仕度儀も候は、其節に至り御勘定奉行へ可承旨挨拶可被致事

とあつて、一応宝永四年以前に札遣いを行なつていた所に限つて、大名の領知高に二〇万石以上、以下に区切つて年数を限定しており、所定の年期になつてなお札遣いの継続を希望する際には勘定奉行へ届出ることを義務づけたのである。但し、この法令が新規の札遣いを妨げるものではなかつたことは、後年の天保一三年（一八四二）諸藩の銀札・米札の發行状況を調査した際の報告書に、大名家六四家（うち代官所一を含む）のうち、三四家が「享保十五庚戌六月始而伺済」と答申していることで裏付けられる（もつとも、その殆んどは宝永四年以前既發行の藩である）。

幣制の統一に腐心している筈の幕府が何故に、一旦禁止した札遣いを許可するに至つたのかは一片の幕府法令から

は窺い知ることとはできないが、大坂の両替商草間直方は「諸侯方近年米価下直ニヨリ取入銀モ薄故、又金銀ノ作廻差支難渋セラル、依之金銀札遣ヒ停止有之國々モ今年ヨリ金銭融通ノタメ札遣ヒ免許セラル」⁽²⁶⁾と述べ、享保七年財政窮乏の故を以て幕府が参勤交代の緩和と交換条件で諸大名に課した上ヶ米の同年停止令と共に、米価低落にあえぐ諸大名への救済策であるとの見解を示している。⁽²⁷⁾

つまり勘定奉行萩原重秀が行なった元禄―宝永の改鑄は品位の低い貨幣の増鑄であつたから、著しい物価騰貴を惹き起したことは知られている。⁽²⁸⁾次いで新井白石が行なった正徳―享保の改鑄は、その反動として品位を慶長の古制に復した収縮政策であつたため、金融梗塞と米価の低落に結果して、領主階級の窮乏を増幅させたのであつた。

また「三貨図彙」には、この札遣い解禁は錢価の騰貴にも原因があるかと推測している。

按ズルニ、此時代国々人数多ク相成、其上金銀吹替等ノ沙汰有ニヨリ、市民金銀ヲ貯フ、慶長ノ金銀ハ良品故、吹替アラバ増歩アルベキトノ考ニテ、市民隠藏ス、仍之金銀不融通ニテ、錢ヲ以テ交易多ク、又鑄錢沙汰無之、仍テ錢ノ価貴ク、諸国困窮故、御免アリシコトニヤ不知

とする。そしてこの解禁令発令の一年以前の享保四年に、幕府が京都はじめ山城国中で銀札通用実施の可否を、京都の本両替商に諮問した事実を紹介している。⁽²⁹⁾もつともこの時の京都町奉行の諮問が、江戸の幕閣の指令に基づいていたのか否かは不明であるが、三年後の享保七年四月二二日の江戸町觸に、⁽³⁰⁾頃日町方において金銀の通用札遣となる旨の浮説を否定する旨の布令があり、幕府が札遣い停止令から解禁令に至るまでの間に、銀札通用を懸案事項として評議にのぼせていたことが窺われるのである。なおこの時の京都両替商の答申は、京都において札遣いとなれば、正金銀が他國へ流出して当地の困窮につながることを、諸国からの登り荷物の代銀の授受に手間がかかり面倒なこと、従つて登り荷物が減少して京都市中の物価が上昇すること、江戸・大坂御藏への御上物も銀札納にならなければ、庶民

は安心しないこと、また当所は大名方の御用達多く、札遣いとなつては急なる御用を弁じ難い等、両替商の立場から否定的な意見を開陳している。そして「三貨図彙」の著者直方も「右等ノ外差支ノ事数多可有之、三都ハ自然ノ天府ニテ、他国城下ノ経済ヲ以テハ手狭ニテ差支ノ事ドモ多カラン」とコメントしている。

ともあれ、解禁後諸藩で発行された金銀錢札は、初発年次不明分を含めると二〇〇藩を超えたとされる。第4表は田谷博吉氏の整理によるもので、時期区分は近世初期を、従来藩札の初発とされる福井藩の寛文元年（一六六一）から元禄改鑄の前年まで、中期は改鑄の始まった元禄八年（一六九五）から幕府が新規の金銀錢札の発行を禁止した年の前年に当る宝暦八年（一七五八）を目途として算出されている。

すなわち宝暦九年八月、幕府は大目付への達として、次のように触出しを指令している。³¹⁾

金銀錢札遣之儀、宝永年中中止候処、前々札遣致来候所々ハ勝手次第可仕旨、享保十五年相達候、其後新規ノ場所ニモ銀札遣願相濟候も有之候得共、新規之分も段々相濟候ては類例も多相成、後々差支之儀も可有之候間、前々より札遣致来り候場所并享保十五年以後新規ニ相願濟候分は格別、右之外向後新規之場所札遣之儀

第4表 藩札発行状況

	奥羽	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	合計
近世初期 (寛文1~元禄7)	1		3	6	8	2	2	22
近世中期 (元禄8~宝暦8)	3	3	5	17	8	7	8	51
近世後期 (宝暦9~慶応3)	5	4	8	16	10	1	7	51
小計	9	7	16	39	26	10	17	124
明治維新时期	6	11	3	3			1	24
合計	15	18	19	42	26	10	18	148
初発不明札	4	17	32	14	5	3	10	85

田谷博吉「近世日本の紙幣」(『阪南論集社会科学編』第25巻1~3号)より

ハ難成候間、可被得其意候

一金錢札遣之儀は、前々通用致来候分も、向後願難成候事

但、當時通用致候分は、年季之内ハ只今まで之通たるべく候

右之通可被相觸候

つまり藩札の氾濫を厭って新規の札遣いの出願は許可しないことを宣告したわけであるが、それと同時に注目されるのは、従前許可した札遣いでも、金札・錢札は年期内に限り、以後の通用を認めないとしたことである。

諸藩の札遣いを銀札に限定しようとした幕府の意図は、これより四年以前の宝暦五年四月の勘定奉行への指令に現われている。⁽³²⁾

今度松平加賀守領分、金銀札遣之儀相願候得共、金札遣は致無用ニ、銀札遣之儀は可為何之通旨相達候、依之向後金札遣之儀ハ都て難成候間、可被得其意候

一奥平大膳大夫領分、金銀札遣之儀は、去申年相濟候事ニ候間、年季之内ハ其仮通用為致、年季明候ハ、金札遣年延相願候共難成候間、其趣ニ可被相心得候

同年の加賀藩の金銀札遣いの願に対し、銀札のみに許可を与え、豊前中津藩に対しては前年許可した金銀札通用に關して、年期内の通用を認め、年期明け後の金札の通用は認めないとしているのである。

この金札・錢札の通用を停止しようとした幕府の意図は、田沼期に特徴的にみられる幣制の変革にあったと、中井信彦氏は指摘されている。すなわち宝暦五年・同九年の上記の指令から数年後の明和二年（一七六五）に発行された五匁銀、つづく安永元年（一七七二）の南鐐式朱銀の発行は、金銀両貨幣間に存する相場の否定、金による貨幣の一元化が意図されたという。つまり従来秤量貨幣であった銀貨を五匁銀という小額定量貨幣の発行により、一二枚を一

兩替、すなわち銀六〇目金一兩の公定比価への実現を目指したものであり、南鐐式朱銀は銀を材料とした実質は金貨であつたという見解を打ち出されたのである。⁽³³⁾

ともあれ、この時期の幕府の意図が貫徹しなかつたであらうことは、田谷氏が表示された後期の藩札の発行状況に具現されているように思われる。安永三年（一七七四）九月、銀札であつても中絶分については再発行を認めずとし、⁽³⁴⁾さらに寛政一〇年（一七九八）には米札名儀の札遣いを制限しているが、⁽³⁵⁾実効性に乏しかったことは天保七年（一八三六）一二月の次の觸書に集約されている。⁽³⁶⁾

御勘定奉行え

銀札遣之儀、前々より札遣いたし来候場所、并享保十五年以後新規相願濟候分は格別、右之外向後新規之場所札遣之儀は難成、金銭札遣之儀は、前々通用いたし来候分も、向後願難成旨、宝曆九年相触、猶又前々銀札遣いたし候場所ニても、中絶之分は銀札遣難相成旨、安永三年相触、米札遣之儀も、前々仕来ニて同有之、引統年季等を以相濟居候分は格別、譬古来右之例有之候共、中絶之分は札遣之儀難相成旨、寛政十年相触候処、近年猥ニ相成、願濟之外、領主、地頭限り銀銭札等差出、又は米札酒札抔紛數名目を以、札遣いたし候場所も有之趣相聞、如何之事ニ候、前々相触候通、金銭札遣難成儀は勿論、銀札米札共願濟之分は格別、其余札遣之儀は難相成事ニ付、心得違無之様可致候、若此上不束之儀相聞候ハ、急度御沙汰可有之候、兼て其旨可存候、

右之通、可被相触候、

十二月

右之趣相触候間、可被得其意候、

とあつて、大名・旗本家による無届の銀銭札や、米札・酒札などの呼称をもつ切手の発行など、幕末に至つて、幕府

の諸大名に対する紙札の統制は有名無実の様相を呈していたように思われる。³⁷⁾ しかも幕府自身、倒壊寸前の慶応三年（一八六七）関東において江戸横浜通用金札と江戸及関八州通用金札を、関西においては兵庫開港札を発行する羽目に陥ったのである。

因みに幕府が兵庫開港に際して、開港用途金百万両捻出のために、商社の取建てと金札の発行を大坂の豪商二〇名に委ねることを建議した小栗上野介ら勘定奉行は、金札発行の成否を次のように見通している。³⁸⁾

楮幣通用之儀は利税之第一にて、実は公儀にて御施行相成候様仕度候得共、一体楮幣は百万両なり、千万両なり現在の実貨備へ置、楮幣に代へ候事故、引替之節何時成共差支無之候間、上下是を信用し通用差支無之、爰に於て利権相立、物価にも相響き不申候得共、支那往昔よりの楮幣并御国諸侯之楮幣は現在之実貨なくして貧国より起り、猥りに楮幣を行候間、引替之節差支候に付上下是を信用致し不申、遂に同種同価之物といへ共、楮幣と実貨との相場格外懸隔に至り候義に御座候、支那并御国内諸侯之楮幣は貧より起り、泰西各国之楮幣は富より起り候義にて、其实天淵之違有之（中略）楮幣は公儀にて御施行之方実に可然候得共、自今御備置之実貨無之、此度町人共之楮幣を考へ候も全く御貯蓄之実貨無之故より起り候義にて同じ楮幣にて利権を失すると利権を得るとは是に基き候

として、紙幣発行の成否はひとへに準備金の多寡にあり、本来は公儀が発行すべきであるが、府庫の窮乏をよく察知している庶民は信用しないであろうから、一と先ずご勘弁を以って楮幣の利権を大坂の商人にお任せあって然るべしというものであって、文中、引換準備金を伴わない藩札が領民に忌避され、札価の低落を招致していることを指摘しており、藩札発行の成功例が少なかったであろうことを示唆している。

もっとも幕府主導によるこの兵庫商社の設立は、大坂の豪商二〇名（大方は両替商）を総頭取・世話役に任じ、外

国貿易の統制・独占を行なうと共に、発券・預金・貸付などの金融業務を営むことが予定されていたというから、後期に諸藩において多く採用された国産専売と藩札発行とを結びつけた「国産会所」方式以外の何ものでもなかったと断定されている。⁽³⁹⁾

五、私札的藩札

ところで諸藩における藩札発行の契機は一樣ではないが、第一義的には領内所在の外貨である正貨を領主の手許に吸集する手段として発行されたのであり、その背景はもちろん領主の財用不足の解決策であった。その意味では近世初頭から伊勢国や畿内で流通した私札とは明らかに次元を異にする。

改めて云うまでもないが、幕藩体制と呼ばれる江戸時代において、石高制のもとで領主財政は年貢米収入が一定時期に集中すること、幕府への勤役、特に参勤交代と御手伝普請の負担などから、諸藩は早期から恒常的な財用不足に悩まされたのである。財政窮乏の打策としては、儉約令、家中からの借上米（減俵）、領内への御用金の賦課、そして領内外、主に三都商人から借銀であり、さらに窮余の策が藩札の発行であった。特に前期の寛文―元禄期の藩札の発行が幕府の幣制統一過程における正貨の供給不足と、領国貨幣の停廃の時期と重なっていたことは、あながち無関係ではないように思われる。

なお、藩札発行の理由として財用不足が根本原因ではあるが、藩士および領民の困窮救済を名目とするものが挙げられているが、実態は銀札の強制貸下げ、正銀による返納の形が多くとられており、正貨の吸集策と異なるところはなかったと思われる。また隣藩の藩札が流入して領内の正貨が領外へ流出するのを防衛する意味での発行もあった。さらに後期に一般的に見られたのが国産専売の実施に際して、産物の買入れ手段として発行された藩札である。

以上が従来主として藩札発行の契機として挙げられているが、田谷博吉氏によって力説されているのが「私札的藩札」の存在である。該札は当初同氏によって「貸付利子取得型」と名付けられていたように、藩当局が藩領の内外からの豪商・富農と結んで、主として領民に貸附け、利子の取得を目的として発行されたもので、文政六年（一八二三）紀州和歌山藩が幕府に願って特許された勢州松坂領の銀札が、その代表的な事例とされる。⁽⁴⁰⁾なお、いわゆる飛地札と呼ばれ、本領から遠く隔った所領で発行された藩札の中には、藩札の名を借りた、實質は私札に類するものが少なかつたのではなからうかと推測される。⁽⁴¹⁾

すなわち、前出の天保七年一二月の幕令からも窺えるように、当時藩札発行の規制は事実上有名無実となり、特に畿内において化政期以降の発行にかかる旗本札を含む藩札の中には実質的には私札と異ならず、権力と共生関係を結んで、紙札発行を営利事業として請負う者が数多く派生していたと思われる。すなわち一定の名義料ないし印料としての冥加金を藩や旗本家に上納することを条件に、請負人Ⅱ札元が原紙の調達から印刷に至る紙札の製造に係わり、発行量の検閲のみを藩役人が係わるという手法である。

一例として三河国長沢の松平源七郎家の長沢札についてみてみよう。

三河国宝飯郡長沢村（現音羽町）を居所とする松平氏は、幕末に山城・大和・河内・和泉・摂津・志摩・近江・播磨・備中の九ヵ国において発行した「享保十五年庚戌稚初鑄」年紀の「長沢産物手形」「享保年中拝領銀子貸附手形」などの銀札が、かなりの量残存している。

この長沢松平氏に関しては、従来四〇四三石の交代寄合で、徳川一門という名門であるにも拘わらず、その所領が狭少であったので各地で手形を発行する特権が幕府から与えられていたと説明されている。⁽⁴²⁾ところが近時発表された小川恭一氏の「名族長沢松平家小史」⁽⁴³⁾によると、この長沢松平家は徳川氏宗家の広忠より五代遡った信光から分枝し

た十八松平の一で、親則を家祖とし宝飯郡長沢を本拠としたが、九代康直の時、家康の関東入国に従い武蔵国深谷において一万石を領したが、文禄二年（一五九三）早逝。慶長の初、家康六男忠輝がその名跡を嗣ぎ、のち越後高田六〇万石を領したが、元和二年（一六一六）改易となって無嗣絶家した。嫡流は絶えたが、康直の父康忠の養子の子孫が三河国御馬村に簞居しており、家の譜牒を捧げて愁訴したのが認められ、享保七年三河國中根村御林のうち一一町余の芝地と、造宅料銀百枚を下賜された。翌年一〇月再び願出て許され、先祖の住地宝飯郡長沢村に移り住んだという。

小川氏によれば、享保七年長沢松平氏の本家筋と認知され、定例参府、將軍代替の参府には献上物を呈し、帝鑑間において御目見の記事が家譜に列記してあるが、家禄はなく、天保五年（一八三三）十人扶持、安政六年三百俵下さるとある。このことは当時の当主忠親の養子忠政が安政三年（一八五六）講武所の剣術教授に登用されたことに拠ると思われる。試みに万延元年（一八六〇）の「大成武鑑」によると、「松平源七郎忠親」は、老中支配、三州長沢住、乗輿白無垢着、年始御礼参府、東照宮御六男越後少将忠輝七代三百俵とみえる（なお慶応二年切米三百俵を地方に直さる）。

以上によってみると、同家名儀で発行された銀札Ⅱ産物手形の「享保十五年初鑄」は全く根拠がなく、また「享保年中拜領銀子貸附手形」は上述の享保七年の造宅料下賜の故事に因んだものと思われる。なお「藤岡屋日記」には講武所出仕となった「松平源七郎倅」について、世上では大名に取立てらるだろうと期待し、御用商人になろうと画策したが「大名にも小名にもならず」⁽⁴⁸⁾ 迷惑がはずれた商人の存在を伝えている。⁽⁴⁹⁾

作道洋太郎氏によって紹介されている長沢松平氏の各地における銀札の発行に、当主自身がどの程度関与していたかは計り難いが、恐らくこのような世上の風評を背景とした名目借りの実質私札と推測するのが妥当と思われる。

すなわち長沢松平氏の上方以西における銀札発行の事実を伝える史料の年代上の初見の史料は嘉永四年である。⁽⁴⁹⁾

当家貸附銀手形先年翹屋宇右衛門え取扱方申付候処、其後右取計行届悪候に付差止引揚申付候処、今以残札散在之趣も相聞難捨置候、依之此度其方え右銀札取調、向後取扱方申付候間、諸事正路取計可申候、仍而如件

松平源七郎内

嘉永四年十一月

渡辺 順 藏 ⁽⁵⁰⁾

内田 甚之助 ⁽⁵¹⁾

伊豫田 啓藏 ⁽⁵²⁾

備中国植木村

小川善右衛門殿

これによつてみると、長沢松平家の貸附銀手形の同地での発行は嘉永四年以前であつたことが明らかであるが、始期は確認できない。

次いで、泉州堺・大和国中での銀札発行に先立つ史料として、安政四年の次のような史料が見出される。⁽⁵³⁾

一 参州長沢松平源七郎、拝領地ニ於いて年出来候椎茸、榎実等之品、泉州堺へ積廻し売捌仕候ニ付、堺御奉行所え当閏五月御届済ニ相成、則同所宿院町林屋甚之助宅を借受、役人共相詰、主用相勤申候

一 右産物売払代銀を以、近国ニて出来候産物之品々買入、国元え積廻し申候ニ付ては、御当国ニて買入積合せ仕度品も御座候ニ付御当地花芝町石川屋助十郎義は、從來当家出入之ものニ付、此度用達申付、前産物之品取扱被致度候ニ付、此段御届申上候、宜敷御聞済被下候様願上申候、已上⁽⁵⁴⁾

該史料は宛書が省略されているが文意から推測すると、奈良奉行所への届書の案紙か写(控)かと思われる。これ

によつてみると所領の産物を堺へ積廻し、売捌のため堺宿院町林屋甚之助方を用所とする旨を同年閏五月堺奉行所に届出たこと、右売捌代銀を以つて近国の産物を買入れ、国許へ積廻すについて奈良花芝町石川屋助十郎を用達に指定したことを届出たことが知られる。文中銀札発行のことには触れていないが、両地における産物手形発行の前提としての届出であつたと思われ、恐らくこの時指定された用達兩名は札元として予定されていたのではないかと思われる。何となれば、前にみた通り長沢松平家が三百石の知行取となつたのは、慶応二年六月であり、当時の家禄は十人扶持、二年後の三百俵の切米取が所領産物云々は実体のないものであつた筈である。

作道氏によれば、安政五年ごろから大和国において発行された産物手形は、一組を三〇組と定め、一口を一〇貫目とした。長沢用所ではこの一組を元引請所において引受させ、その下請的地位にある小引替所を通して産物手形を一般民間にまで流布させようとしたと説明されている。同氏によって紹介されている「産物手形取扱方仕法帳」は次の通りである。

覚

一、産物手形三百貫目也 老組と相定、但し、老口ニ付拾貫目宛、三拾口也

一、冥加銀七貫五百目也 年々上納之事

一、銀拾九貫五百目也 老度限、手形紙価并摺立料共、諸入用ノ高

一、同三貫目也 同断世話人共、雜用之積

合ノ銀三拾貫目也

下請札之訳

一、産物手形拾貫目也 老口分

此冥加銀貳百五拾目宛 年々上納之事

外ニ銀七百五拾目也 紙価摺立料共、諸入用メ高

合て銀老貫目也

右、三拾口老組と相定、引替所三人組合相勤ニ付ては、下請札之者より儘成根証文請取置、手形相渡、融通可為致候事

引替所仕法

一、産物手形三百貫目也 三人組合規定書為取替、引替所相勤候筈

右、引替手当銀、利足并ニ世話料、諸掛り、手当見込ニて、銀三貫目宛、年々相渡候事

右之通相定、拾々年限取扱年限相立候へ、切替届之者は、本之儘取扱可為致候事

みられる通り、産物手形三〇〇貫目に対し札元は冥加銀七貫五〇〇目を松平家に上納することになっており、手形の製作費も札元の負担となっており、その他の雜費を含めて合計三〇貫目の経費が計上されている。つまり松平家は手形発行に關して何らの経費を要さず、発行額の二・五%の名儀料を収得する仕組みになっていたことが判る。

天理大学天理図書館には、この長沢松平家の産物手形が大和国中に分散的に広まっていたことを窺わせる各地の札元・小引替所引受に關する願書・約定書の類が散見されるのであつて、その一例を示すと、次の通りである。⁽²⁾

乍恐奉願上候

一御館様御国産之品御廻ニ付私ともえ売捌方并御銀手形御取扱被為仰付被下候様、此度奉願上候、尤御称号ニ御差障之儀は勿論、諸事正路ニ取扱可仕候、万一不正之儀有之候得は如何共被為仰付可被下候、右願之通御聞濟被成下候得は難有奉存候、以上

安政六末年十月

和州八木村

醍醐屋六三郎 ④

同村 小泉屋清兵衛

(貼紙)

「上京留守中ニ付無印御断奉申上候、追而調印可仕候、已上」

長沢様御役人中様 (傍点は引用者)

文言通りうけとすることは若干躊躇されるが、忠輝七代を公称する長沢松平の「御称号」が一応札元引請の根拠となっており、長沢の産物手形の名称で一種の信用通貨として流布したことが窺われ、この他河内・和泉・近江・志摩などで流布した長沢札も、ほぼ同様な手法が採られていたのではないかと思われる。

六、幕末畿内における紙札の流通状況

——終りに代えて——

以上、長沢札に関して冗長な説明を加えたのは、後期の私札の多くが、宿駅札、鉱山札など特定の需要に応じたものを除けば、概ね名目的な名称を冠した、同巧異曲のものと推測されるからである。すなわち、京都・奈良などで集中的に発行された寺社札は「修復銀手形」「材木買入手形」「作事渡手形」、また御寄附御祠堂銀の「御貸附手形」等々、概ね堂塔の再建・修復の財源を賄う名目で発行されたものが多いが、実際にそのような用途に使用されたとは考え難く、門跡寺などの寺格が富商・富農ら発行の私札の権威付けの役割を果たしたものと解せられる。

幕末におけるこのような私札の氾濫を、社会経済史上に如何に位置づけるべきかは、私の能力の及ぶところではな

い。ただ最近、紀州古泉会同人の「古札探訪記」⁽⁵³⁾に興味ある史料が紹介されているので取り上げておきたい。すなわち日本銀行貨幣博物館所蔵の「米札仕法一件書拔」は、文政一一年（一八二八）堺の町人道具屋市右衛門が河内国狭山藩北条家（一万一〇〇〇石）へ提出した米札発行に関する仕法書である。

同地は天領・畿内小藩・東国大名飛地領などが錯綜していたが、近年の小給大名・旗本領における米札発行に触れ、それは領主の台所向の一助にもなり、下々の融通にも相成、兩善の策として狭山藩での米札の発行を進言したものである。

泉州岸和田御城守岡部美濃守様、同伯太渡辺越中守様、右兩御領分銀札、享保時代ニ出来之由ニて御領分堺表專

通用ニて追々御勝手向宜敷哉ニ承り罷在候、然ル所其後打絶、外様ニも一切無御座候所、文政四辛巳年高木主水

正様御領分始て米札と相唱、御領分用水池々川々堀浚賃銀米札ニて相渡、堺表町人誰方ニて右米札引替可申義、

則当地御奉行所へ、只御届ヶ込ニて相済候よし、通用之義は摂河泉在々堺表一統通用夥敷銀高風聞承り罷在候

堺の今井役所（旗本一、三〇〇石）はじめ文政年中に発行された紙札が、いずれも「米札」と称したのは幕府の金銭札禁止に対する隠れ蓑であつたと思われるが、通称「丹南札」と呼ばれる河州丹南の高木氏の「用水池々川々堀浚賃銀米札」は領外の摂河泉在々堺表一統まで通用したこと、発行に関する許可は堺奉行所への届出だけで済まされると述べている。

一今井左衛門様御米札之義、堺表御役所御届書ハ別紙ニ写奉差上候、御小給故大造ニも難出来候得共、当時余程之通用仕候（中略）尤御知行所へ摂州之事故大坂表御達入、与力中へ御聞合之所、御奉行所へ御届ヶニ不及申、自然當御奉行所掛り合之義出来候ハ、知行所米切手ニて外ニ通用之義無之旨ニ申開キ可然、且又米札盜賊持帰り御呼出しニも相成候節ハ前文之通可申披、右米札代銀を以買帰り候ハ、何之子細も無之旨御達入、与力中被

仰候、依之大坂御役所へ御届々無御座旨、承り罷在候

この場合も、今井家の米札が領外に流通することを予定したと思われ、問題が起きた時の対応を取締る側の大坂町奉行所の与力が示唆していることが注目される。

一 泉州伏尾久世長門守様御屋敷御領分米札、右今井様同様ニ出来、去亥十二月上旬も通用有之よし、尤堺表御役所御届々之義ハ今井様同様ニて堺表引替所町人名前ニて御届々相済候よし承り罷在候、大坂表之義ハ難相分、併大坂御立入兩替渡世之もの引受ニて四百貫匁余り、尚又御領分ニて四百貫目余り、都合八百貫匁余も出来候風聞承り申候、尤通用之義ハ併堺表泉地ニてハ新札故、高木主水正様程ニハ通用無之よし承り罷在候

伏尾札は常州関宿藩の飛地領で、作道洋太郎氏が特殊領国型として把えられた藩札であるが、今井札同様札元の公的な届出は町人であった。これも領外通用が言外に読みとられるが、発行高八百貫目のうち半額は大坂兩替商の引請とされている。この他、摂州麻田の青木甲斐守の米札は大坂玉水町の加嶋屋外一人の引請で領分は勿論、大坂市中にも通用し、去暮凡百貫目を発行したところ、子正月末頃十貫目余の引替希望者があつた由を伝えている。

このような米札の引替所引請人の益銀はまちまちであるが、丹南札の場合、当初札元より引替所へ老匁につき式厘引で渡され、引替所からは老厘引で諸方へ出したところ（差益一厘で一％）、一般の氣請けが悪かったので、村々引替所では正味の受払いを行なっており、堺表の引替所の者は御扶持を頂戴しているとしている。

このように差益なしの正味受払いで、なお且つ引請人の志願者が存在する理由は「勿論堺引替へハ三十メ匁斗入銀在之候よし、廻り札ハ追々引替罷在候、尤廻り込札ハ追々諸方へ相働キ相廻し候へ共自然米札右入銀高も過分相廻り込候へハ右米札印元兩人之内へ堺替所も申遣候得は印元も銀子持参ニて米札之銀高引替ニ相成申候」とみえ、勿論引替準備金の手当は必要であるが、米札の流通が極めて順調であるから準備金高はそれ程の額を必要としないと見通し

ているように窺われる（このことは去年幕発行の麻田札百貫目の回収率が一〇%であったことで裏付けられる）。更にこのような米札流行の背景には

尤当時米札流行之義ハ近年來世上一統小玉銀無數 金錢等ハ時々相場高下在之、前文之通米札候てより下々至て安心通用勝手宜敷、末々迄大慶仕候御事ニ御座候と述べている。

狭山藩の米札発行の引請を旨す道具屋の意見は伝聞に基づくところが多く、マイナス面は消去されていることが考えられるが、同地方の米札が所領と関係なく錯綜して流通していたことが窺われると共に、いわゆる藩札（旗本札を含めて）が幾内小給領主の財用補填という本来の目的よりも、庶民の貨幣需要の増大の中で、事実上私札に転化していたことを知ることができる。しかも中央政局の意図に拘りなく地元幕吏がそれを容認せざると得なかったことも注目される。その背景には幕府正貨の小玉銀の不足、金銀相場の不安定が指摘されている。文政以後の改鑄が前代にも増して悪貨の増鑄であったことは知られている。すなわち幕府の貨幣政策の名目貨幣への傾斜が、より名目貨幣としての紙幣の行用に、一般庶民が安定性を求めて行った趨勢が看みとれるのではないかと思われる。それはとりまおさず上方における幕藩権力の崩壊の象徴でもあった。

注

- (1) 両者の主張には、とりあえず作道洋太郎「近世経済発展と藩札の発行―田谷博吉氏の見解に対する私見―」（『社会経済史学』四八の二、田谷博吉「近世日本の紙幣」（阪南大学阪南論集、社会科学編第二五巻第一・二・三号）
- (2) 享和二年度會員多著『大神宮叢書、神宮隨筆大成後篇』
- (3) 以上、中世末から近世初頭にかけての通貨の叙述は、小葉田淳『日本の貨幣』に拠る。
- (4) 榎本宗次『近世領国貨幣研究序説』および中井信彦『幕藩社会と商品流通』

(5) 「御当家令條」(石井良助編『近世法制史料叢書』第二、一四五頁)

(6) 注(1) 田谷氏論文。

(7) 吉永昭「伊勢商人の研究」(『史学雑誌』七二の一三)

(8) 河原一夫「江戸時代の帳合法」

(9) 国文学研究資料館史料館所蔵「富山家文書」史料番号一六四

(10) 朝尾直弘「木地屋銀札について」(『日本史研究』七二号)

(11) 佐々木潤之介「幕藩權力の基礎構造」九六頁。

(12) 『大和下市史』には横井時冬「日本商業史」を引用して、古市を手形流通の嚆矢とし、その發生の理由は下市の六斎市に近傍の農民が集つて百貨を売買したが、山中のことで嵩高な錢貨の持運びの不便から切手の流通が始まつたと説明されており、中国の紙幣の始まりとされる北宋時代の四川における交子の發生の説明と類似している。

(13) 朝尾氏の前掲論文中に、元和八年八月三十日の板倉重宗の發した京都町触中にみえる「はかき」を端書Ⅱ紙幣の禁令と解されているが、田谷氏はこれに同意せず、売買の當事者間で取替わした送り状とされる(前掲、田谷氏論文)。筆者も堂島の商慣習を記す「稻の穂」の「客方へ正味帳合米共売付買付を遣す、これも判書という」(島本得一「堂島米会所文献集」という説明や、幸田成友「士魂商才」

に、「口約束と手拍子とで売買を結了し仮令端書を渡しても売端書だけで済んだ云々」(『幸田成友著作集』第七卷、四四九頁)とあり、紙幣とは別のものと考えている。

(14) 作道洋太郎「畿内における銀札流通の展開」(『三井金屬修史論叢』第一〇号)

(15) 享保一五年平野郷町惣会所「寛帳」(杭全神社保管)。

(16) 前掲、朝尾論文の中に、木地屋銀札が堺政所から何らかのクレームがついたことについて代官高西夕雲の返書状が紹介されている。その中で久宝寺・平野郷の札は在郷のことで「代官のかまいハ御座有間敷」と述べている。

(17) 平井本「水野様御一代記」から次の史料を紹介している。
一 従前々取遣真銀三匁ヲ丁銀拾匁之算用ニ菊屋太兵衛札ニ而取遣可仕候、歩合之義は外引ニ可仕事、
一 札錢之儀は老匁ニ付老厘之宛、菊屋太兵衛取可申事
一 五厘三厘之儀ニテ取遣候儀不成候ハ、錢老匁文ニ付銀拾七匁之算用ニ互取遣可仕事

寛永七年正月十一日 中山 将監

堀江五左衛門

萩野新右衛門

菊屋太兵衛とのへ 広田 図書

『福山市史』中巻、一一七—一八頁。

(18) 『明治前期財政經濟史料集成』第一二卷の一、一八六頁。
(19) 『毛利十一代史』第二卷、三七二—三頁。該史料は井上

勝生氏の教示による。

- (20) 所三男「尾張藩の財政と藩札」一『社会経済史学』五の四)

- (21) 『仙台叢書別集』第二、三二八—九頁。

- (22) 『会津藩家世実紀』第五卷。

- (23) 兌換準備金枯渇の表面化、札価の暴落と物価騰貴、資金詰りによる回収不能札の切捨等が、ほぼ諸藩に共通した現象であったと思われる。

- (24) 『御触書寛保集成』(「一八三一」)

- (25) 『癸卯雜記』(『日本財政経済史料』巻二、八六〇—七二頁)

- (26) 『三貨図彙』物価之部、巻六

- (27) 中井信彦氏は幕府の享保期の緊縮政策の一環として、大名領内の土木工事に関する幕府の負担軽減のために、一国一円又は二〇万石以上的大名領に対する幕府支出の打ち切り(『御触書寛保集成』(「一三五六」)に注目し、「それはこの時点で幕府の立場でみた、藩アウタルキーの成立し得る条件を示したものと解することができ、そのような条件をもつ領国所有者としての大名を、幕府の経済的保護のらち外に置くことによって、幕府自身の財政を守ろうとする意図をあらわにしていると解される(『宝暦—天明期の歴史的位置』(『歴史学研究』二九九号)とされており、米価低落による領主層への救済策としての札遣い解禁と表裏の関係

をみることができる。

- (28) 元禄の改鑄に関しては評価の分れるところであるが、中井信彦氏は「元禄の改鑄は、小農経営の商品経済への参加に基づく生産構造の変化に対応するための、幕府の経済政策として画期的な意味をもつということができる(中略)品位を低下させた貨幣を発行して、それを通用させ得ると考えた幕府当路の意識には、通貨が物品貨幣の域をぬけ出て、すでに貨幣に純化しているという判断が前提されていた筈である云々」とみて居られる(前掲論文)。

- (29) 『三貨図彙』附録卷三

- (30) 『正宝事録』第二卷(「一八四〇」)

- (31) 『御触書宝暦集成』(「一三二二」)

- (32) 同右(「一三〇八」)

- (33) 中井信彦『転換期幕藩制の研究』。なおこの五匁銀六十目通用を立案した勘定吟味役川井次郎兵衛(久敬)は、発令以前に諮問に応じた両替商が、現実の金銀相場を無視した、そのような五匁銀は流通性に乏しいとの理由で難色を示したのに対して「国ニより、紙ニ判を押、はかきと申、専通用之所も有之候、此儀ハ正銀ヲ以致候事故、猶以通用宜、格別之事ニ候」と反駁したという(中井信彦「五匁銀六十目通用令について」『史学』三六巻二・三号)。幕府の経済官僚の紙札に対する認識の一端を窺わせて興味深い。
- (34) 『御触書天明集成』(「二八六七」)

- (35) 『御触書天保集成』下、〔六〇三九〕（該法令は「米穀之部」にみえる。）。
- (36) 同右、「金銀銅銭之部」〔六〇一八〕
- (37) 柳河藩士三善庸礼は、その著「国家損益本論」（天保一三年）の中で、九州諸藩の銀米鈔は近頃は所定の発行期限後は、譜代大名小笠原侯を除けば、殆んど幕府へ無届で発行されていると述べている（作道洋太郎『日本貨幣金融史の研究』一四〇一頁）。
- (38) 「開国起源」下『海舟全集』第二卷六〇一頁
- (39) 新保博『日本近代信用制度成立史論』四五頁。
- (40) 田谷博吉、前掲論文。
- (41) 作道洋太郎氏が特殊領国型の藩札の一例とされる下総国関宿藩の飛地泉州伏尾領における中辻吉兵衛を札元とする藩札は明治政府の藩札整理の対象にならなかったのはその証左とみるべきではないか。
- (42) 水原韻泉「長沢札に関する文書」（『貨幣』第一一八号）。
- (43) 日本家系図学会『姓氏と家紋』第六〇号。
- (44) 『新訂寛政重修諸家譜』第一、二一〇一三頁
- (45) 「有徳院殿御実紀」享保七年正月十二日の条。
- (46) 『近世庶民生活史料藤岡屋日記』第七卷（二七六頁）の「安政三丙辰年四月講武所規則寛書并出役名前」の中に「心形刀流、伊庭軍兵門人、三州住、源七郎伴松平祝之助」の名がみえる。
- (47) 同右、一七八一九頁。
- (48) 作道洋太郎「前掲書」・同「近世日本貨幣史」
- (49) 注（42）と同じ。なお宛書の備中国植木村を水原氏は吉備郡としているが、現地名は特定できなかった。
- (50) 作道洋太郎『日本貨幣金融史の研究』二一八頁。
- (51) 同右、二二三頁。
- (52) 天理大学天理図書館所蔵、「八木町周辺文書のうち」。
- (53) 平成四年一月発行、紀州古泉会（代表松木正巳、橋本市古佐田二一八一六）